

いま五輪レガシーとは 論 耕

2020年の東京五輪・パラリンピック会場の見直しを巡り、五輪のレガシー（遺産）が議論されている。前回の東京五輪と時代状況が異なる現在に必要なとされるレガシーとは。

既存の場に 価値生み出せ



56年、東京都生まれ。作家。2000年から6年、長野県知事。衆院・参院議員も歴任。

田中 康夫さん 作家

五輪に象徴される一過性のイベントは、必ずリバウンド(反動)が生じます。

長野冬季五輪から2年後の2000年、長野県知事就任直後に驚いたのは、県の借金である起債の返済利息だけでも1日1億5千万円近くあったことです。

本体的にないダム計画で、総事業費400億円の半分の200億円が既に執行されていました。この予算で、五輪のボブスレーとリュージュの会場に行く道路や橋脚が整備されたのです。五輪関連予算ではまかないきれないと、眠っていたダム計画を復活させた格好でした。

財政再建団体転落寸前だと僕が情報公開すると、「寝た子を起すな」「県民に不安を与える」と異論も噴出。祭りのあとの喪失感が県内には漂っていました。

特に五輪招致委員会の会計帳簿「燃却」問題は県民にとってトラウマで、「負のレガシー」になっていました。県の調査委員会を設け、帳簿の一部とみられるコピーを見つけて、9千万円の使途不明金を認定しました。主催都市の長野市は、当時造った競技会場の維持管理で現在も大変だと報じられています。

20年東京大会の競技会場の場所や費用が議論になっていますが、競技会場は造るコストより維持管理の方が深刻。こうした費用は地元自治体が持つのが一般的で、負担が重たい。五輪のような国家的事業を機に、ハコモノ公共事業の維持修繕費用の負担のあり方を抜本的に見直すべきです。

レガシーやレジェンドは、後からついてくるものなのに、実施前からそれが目的になるのは本末転倒。大会後の

リバンドを減らすには、準備段階から再生を目指すことが重要だと思えます。

20世紀型の「造る」から、既存の場所を活用して新たな価値を生み出す「創る」に転換してこそ持続可能な社会。例えば、皇居前広場に間伐材で仮設席を設け、開会式と閉会式を行う。旧江戸城の堀や石垣、櫓、松林が見える場所での開催は、世界中の人々に日本での五輪を深く印象づけます。

市民生活に密着した発想も大切です。森林面積が国土の3分の2を占める日本。京都市定書採択国として、ガードレールや鉄道のホームドアを、鋼鉄製と同じ強さの木製に転換するなど、身近なコモディティー(汎用品)で変えていけることはたくさんあります。

東京も五輪開催と同時に人口減少へと転じ、コミュニティが希薄な都市部の高齢化への対処は待たなし。「確かさ・優しさ・美しさ」の再生につながる取り組みこそ急務です。

五輪のあり方、社会のあり方を画期的に一新する具体案を、開催都市である東京は今からでも出すべきでしょう。

(聞き手・吉浜織恵)